

日本中國學會報 第七十五集  
二〇二三年十月七日 發行 拔刷

## 愛欲と革命の大學敘事

—— 茅盾『路』における二つの版本 ——

小川主税

# 愛欲と革命の大學敘事

——茅盾『路』における二つの版本——

一九八

小川 主 税

## 一・問題の所在

一九三〇年三月二日、魯迅（一八九一～一九三六）を中心とする左翼作家たちにより、「無産階級革命文學」を標榜した左翼作家聯盟（以下、左聯と略稱）が結成された。左聯の加盟者は、結成当初は五〇餘名であったものの、その後一五〇名ほどに達し、旺盛な文學活動を展開してゆく。たとえば丁玲（一九〇四～一九八六）は、左聯加盟と同年に執筆した中篇「一九三〇年春上海（之一）」（一九三〇）において、戀人との關係を斷ち、革命運動家の青年とともに社會運動へと邁進してゆくヒロインを描いている。さらには妻の丁玲とともに左聯に加盟した胡也頻（一九〇三～一九三二）もまた、長篇『光明在我們的前面』（一九三〇）において、五・三〇事件をきっかけに革命に目覺め立ち上がる若い男女の姿を活寫していた。一九二〇年代に創作活動を開始した兩者は男女の戀愛を濃やかに描寫する作家として知られていたが、左聯への加盟のちにその作風を大きく轉換していたことは注目に値する。左翼文化運動の最大の組織が成立したことにより、中國の文壇は國家や革命をめぐる「大きな物語」を生み出す言論空間へと徐々に變

容しつつあったと言えよう。<sup>③</sup>

以上述べてきたような左聯を中心とする言論空間において、最も目覺ましい活躍を遂げた作家のひとり茅盾（一八九六～一九八一）である。茅盾は一九三〇年四月に左聯に加盟し、のちには同聯盟の行政書記をも務めた。本稿では、彼が左聯加入と同年に起稿した中篇『路』<sup>④</sup>（執筆は一九三〇年二月、脱稿は一九三二年二月）を取り上げ、一九三〇年代において中國文學の主流を形作った左聯という場が文學作品にどのような影響を及ぼしていたかについて考察してみたい。中國の言論空間をめぐる問題について論じるに際し、なぜ茅盾の『路』に着目するのか。前もってここに私見を述べておきたい。

『路』は、大學をまもなく卒業する男子學生・火薪傳（以下、薪と略稱）が女學生・杜若との濃密な戀愛關係、および二度にわたる學生運動を経て革命の世界へと飛翔を遂げる物語である。こうした筋書きから成る本小説には二つの版本が存在する。ひとつは一九三二年六月刊行の光華書局版（全二二章二〇七頁）、そしてもうひとつは一九三五年一二月刊行の文化生活出版社版（全二二章一六六頁）である。茅盾は光華書局版に大幅な改訂を施したうえで、一九三五年に文化生活出版社

で再出版している。その経緯について、文化生活出版社版のあとがきには次のように記されている。「初版本には誤字がとて多かつた。現在のこの第二版では、全ての誤字の校正に努めたこと、言うまでもない。同時にわたしは文章のいくつかもまた削除している。合計しておよそ三、四頁にもなるだろうか。削除された部分の多くは不必要な戀愛描寫であり、これもまたその友人の意見を尊重したものだつた。彼は初版本を讀んだ後、小説中のいくつかの戀愛描寫が不必要であると述べた<sup>⑤</sup>。ここには、茅盾が初版本の誤字の修正に努めていたことに加え、ある友人の要請に基づき「不必要な戀愛描寫」を削除してゐたことが綴られている。その友人こそは、魯迅とともに左聯の文學活動を理論的、思想的に牽引してゐた瞿秋白（一八九九〜一九三五）である<sup>⑥</sup>。

瞿秋白は、一九三一年の中國共產黨第六期四中全會において党中央の役職を解かれた。政治的な失脚ののち、彼は同年の夏頃に左聯に加わり、マルクス文藝理論家として少なからぬ文藝論争に参加してゆく。左聯が經た三つの論争、すなわち民族主義文學批判、文藝大衆化論争、第三種人論争は、いずれも瞿秋白が提起し、その基調を形作つたものである。このことは彼が文學結社としての左聯に與へた影響の大きさを物語つていよう。では、瞿秋白はどのような文藝理論を提起しようとしていたのか。このように問うとき、注目されるのは左聯の機關誌『文學導報』に掲載された「中國無産階級革命文學的新任務」<sup>⑦</sup>（一九三一）である。馮雪峰（一九〇三〜一九七六）が起草し、「瞿秋白が少なからぬ心血を注いで改め」た同文書は、現實社會の生活の中の廣範な題材こそが「無産階級革命文學」の取り上げるべき内容であり、小資産階級式の「革命の興奮と幻滅」、「戀愛と革命の衝突」などといった

觀念的で虚偽に満ちた題材は一掃されねばならないと主張する。瞿秋白らは、作品の内容や題材といった具體的な問題に目を向けたうえで、左聯の文學的立場を明確に示していたのである。

さて、右に見たような文學觀を打ち出した瞿秋白は、『路』に對してどのような指示を與えていたのか。管見の限り、『路』に對する瞿秋白の記述は見當たらぬ。瞿秋白の提言を受けて「不必要な戀愛描寫」を削除した旨が茅盾の晩年の回想録に記されるのみである<sup>⑧</sup>。だが本稿では、ある一篇の評論を取り上げてみたい。それは、瞿秋白が茅盾の中篇「三人行」<sup>⑨</sup>（一九三一）について論じた評論「談談「三人行」」<sup>⑩</sup>（一九三二）である。

「三人行」は『路』の脱稿からわずか數ヶ月後に執筆された作品である。卒業を目前に控えた若い男女學生の彷徨を主題とする點で『路』との共通點を見出すことができる。以上を踏まえたとき、評論「談談「三人行」」において注目すべきは、「三人行」の主人公・云を「市儈主義」すなわち俗物主義の代表とし、彼の「革命」に對する不徹底な態度を容赦なくきざろしている點である。こうした觀點からの批判は、「三人行」と執筆時期および主要な筋立てが類似する『路』においても繰り返されてきた可能性がある。

茅盾の『路』は、「不必要な戀愛描寫」によつて左聯の有力な論客たる瞿秋白の批判にさらされることとなつた。『路』がどのように書かれ、讀まれ、そして削除されたのかを論じるとは、一九三〇年代の中國における言論空間と文學作品のありように關する問題について考察するうえで、またとない重要な資料を提供してくれるのではないだろうか。

## 二. 問題作としての『路』

『路』のあらすじは以下の通り。舞臺は一九三〇年の武漢。没落した士大夫階級出身の薪は、大學卒業を目前に控えながらも、自身の將來に希望を持てずにいた。薪は裕福な家庭出身の女ともだち・蓉と戀愛關係を結べば、彼女の父親から職を斡旋してもらえないのではないかと打算的な考えを巡らせるが、なかなか行動に踏み切ることができない。やがて薪は快活で愛らしい女學生・杜若の魅力溢れる身體に心を奪われるようになる。

ある日、大學構内の壁新聞に舊體詩を執筆したことを理由に、薪は大學總務長・老荊から激しい批判を浴びる。學生の主體的な活動を不當に抑壓したこの一件をきっかけに、二つの學生團體、すなわち頭腦派の「秀才派」と武闘派の「魔王團」は專横をきわめる老荊を排斥するため、學生運動を展開する。薪もまた學生運動の波に飲み込まれてゆくのだが、なおも彼の心の大半を占めていたのは、將來への不安と杜若の魅惑的な姿であった。

しかし、薪はある人物との出会いを経て、學生運動にも次第に關心を寄せるようになる。その人物こそは、薪のかつての級友・雷である。優れた革命家へと成長していた雷は、一枚の油繪を記念品として薪に贈る。その油繪に描かれていたのは、杜若と瓜二つの女性であった。薪は杜若がかつて革命家として活動していたのではないかと疑念を募らせてゆく。

時を同じくして、學生たちの間で大規模な授業のボイコット（罷課）が勃發する。雷の啓蒙を受けた薪は學生運動にも精力を傾ける一方、杜若への情熱的な欲望もまた隠そうとしない。對する杜若も革命

家のような口ぶりで薪の衝動的な言動を諫めながらも、彼への熱い想いを抑えきれずにいる。葛藤を繰り返す薪はその後、暴徒化する學生たちに押し倒され脚を負傷してしまう。物語は、病床で學生運動の新たな動向を杜若から告げられた薪が雷とともに革命の世界へ邁進することを決意する場面で閉じられる。

國民革命の挫折を描いた『蝕』三部作ですでに作家としての地位を確立していた茅盾の次なる中篇ということもあり、『路』は少なからぬ批評家の耳目を集めた。では、一九三〇年代の中國において『路』はどのように讀まれてきたのだろうか。まず取り上げておきたいのは、光華書局版『路』刊行と同年の一九三二年一月二〇日に雑誌『讀書月刊』第三卷第五期にて掲載された金民天による書評「『路』的批判」（一九三二）<sup>13</sup>である。タイトルに「批判」と示された本書評では、（一）故事、（二）技巧、（三）思想の三項目から『路』が批判的に讀み解かれてゆく。そのうちの（三）思想の冒頭部分について見てみよう。

作者は小資産階級の革命と戀愛の心理を描くことに長けている。そのため、『路』の主人公も當然こうした枠組みから抜け出すことはできなかった。異なるのは革命と紛争の部分にすぎない。没落した小資産階級の青年の人生に對する懷疑、あらゆる物事に對する神經質さが本書の主人公の典型である。主人公の意識は不健全であり、このことは明白な事實である。<sup>14</sup>

右の批評は作家茅盾の非凡な才能を認めながらも、『路』の主人公が彼の得意とする枠組、すなわち「革命」と「戀愛」の枠組から脱し

切れていないと批判する。茅盾の創作に對する如上の指摘から想起されるのは、一九二八年に始まる革命文學論争であろう。本論争の最中には、小資産階級の「革命」と「戀愛」に描寫の重點を置いた『蝕』三部作が革命文學を標榜する錢杏邨（一九〇〇～一九七七）らから激しく攻撃されている。それに對して茅盾は評論「從牯嶺到東京」（一九二八）において、「中國革命の前途はやはり完全に小資産階級を置き去りにすることはできないと思う」と述べたうえで、文學藝術の題材に小資産階級を取り上げることの意義を繰り返し強調していた。<sup>15</sup>このような背景を踏まえれば、金民天の批評は革命文學論争の延長線上に位置するものであり、さらには『路』の小説自體が革命文學論争へのある種の回答の意味を有していると解してもいいだろう。<sup>16</sup>

また、金民天と同様の觀點に基づく批判はほかの書評子のそれにも見出せる。本稿では、先の『讀書月刊』第三卷第五期に同じく掲載された瑞民による書評「茅盾底路」<sup>17</sup>（一九三三）を併せて讀んでみたい。本書評は『路』を丁寧に要約したうえで、内容上の問題點をいくつか列擧する。そのうちのひとつには次のように記されている。

茅盾は薪を描くに際し、もともと彼をのちに「極端な革命」へと向かわせるつもりであつたが、その試みは逆に失敗してしまつた。どれほど重大な革命闘争のもつても、さらには病院内であつても、薪はなおも戀愛のことを片時も忘れていないことが見ればすぐにわかるからだ。通常であれば、狂つたほどに激しい革命への感情が血の中を駆け巡っているときには、戀愛のことなど問題にならな<sup>18</sup>い。

瑞民の評論もまた、「戀愛」と「革命」（學生運動）という二項に基づき『路』の内容をめぐる問題について検討を加えている。その點においては、本書評は金民天のその域を出るものではない。ただし見逃してはならないのは次の記述である。「通常であれば、狂つたほどに激しい革命への感情が血の中を駆け巡っているときには、戀愛のこ<sup>19</sup>となど問題にならない」。この部分には、「重大な革命闘争」の最中にあつて個人的な感情たる戀愛など頭に上るはずはないという書評子の憤慨が綴られている。つまり瑞民の批判の矛先は、「重大な革命闘争」に直面しながらも激しい愛の感情に現を抜かす一對の男女學生に向けられているのだ。あるいは「戀愛」を偏重する茅盾自身にも批判の眼は向けられていたのかもしれない。いずれにしても、「革命」とはすべからず「戀愛」の上位に位置づけられるべきものであり、決して「戀愛」が「革命」の妨げとなつてはならないと説かれていることは確かである。

以上、一九三〇年代の中國において茅盾の『路』がどのように讀み解かれてきたのかについて概観してきた。金民天および瑞民が述べるように、『路』の物語は男子學生・薪と女學生・杜若を取り巻く過度な戀愛模様、および二度の學生運動を中心に展開してゆく。そして『路』の同時代的讀書法において注目すべきは、劣位に置かれるべき個人的な愛情が何よりも優先されるべき「革命」よりも上位に位置するように讀まれていたことである。瑞民の書評は一九三〇年代の中國において『路』がそのように讀解される可能性を秘めていたことを端的に示している。

あるいはこのような解釋の餘地を残していたからこそ、左聯の理論的支柱であつた瞿秋白は「不必要な戀愛描寫」の削除を茅盾に要請し

ていたのかもしれない。彼が起草に携わった「中國無産階級革命文學的新任務」が小資産階級のな題材を抛擲せよと主張していたことは前節で述べた通りである。瞿秋白が同時代の書評子と同様に、個人的な戀愛感情にばかり執着する男女學生を槍玉に擧げた可能性は十分に考えられるだろう。

では、薪と杜若が繰り廣げる戀愛模様とは、具體的にどのようなものであったのか。そのことについて考えるためにも、ここでは男子學生・薪のまなざしに着目してみたい。二度にわたって學生運動の荒波に飲み込まれる薪は、女性の身體を執拗に眺め懊惱を繰り返してゆく。こうした視線は、『路』を讀み解くためのひとつの重要な鍵となりうると思われる。本稿では、特に女學生・杜若に對するまなざしについて取り上げ検討してみたい。

### 三、魅惑的な身體へ

白水紀子らがつとに指摘するように、茅盾の小説には女性の肉體に向けられた執着的なまなざしの描寫が少なくない。たとえば『蝕』三部作のひとつである「動搖」(一九二八)には、國民黨幹部・方羅蘭が革命家の新女性・孫舞陽の魅力的な胸に目を奪われる姿が繰り返し表現されている。本稿で取り上げる『路』もその例に漏れず、茅盾は杜若の身體に幾度となく視線を注ぐ薪の姿を濃やかに描寫している。まずは物語序盤の場面から、薪が杜若に注ぐまなざしの特徴について見てみよう。「わたし、卒業まで勉強したくなくなつたわ。いつたいわたしたち、學校で何を學んだっていうの？」と大學生活への不満を露わにする杜若を前に、薪の心は激しく動搖する。

薪は突然立ち止まつた。彼の憂いに満ちた鋭いまなざしが女もだちの身體に注がれた。自分より背がずつと低くて年もずつと若く見えるし、いたずら好きでいつもあちこち動き回っているこの杜若がまさかそんな話をするなんて！そんなのは世慣れした蓉の口から發せられるべき話だ！彼の視線は彼女の顔へと移つた。すこぶる白い肌、大きくて黒々とした瞳、それに表情豊かな眉をした顔。これまで彼はしげしげと彼女の顔を見たことがなかったし、今のような心持ちで彼女の顔を見たこともなかった。彼はふと申し譯なさを覺えて、視線を落とし、化石になつたかのように少しも動かなくなつた。

天真爛漫な杜若らしからぬ苦々しい口ぶりに、薪はまじまじと彼女の姿を見つめることとなる。この場面において興味深いのは、杜若に對するまなざしがカメラワークのように次々と轉じてゆくことである。薪は彼女の身體、そして表情の一つ一つを眼に焼き付けようとする。舐め回すかのような執拗なまなざしは、對象への強烈な執着を物語つていよう。こうした視線は先の引用以外にもいくつか見つけることができる。たとえば、大學總務長・老荊の排斥を掲げた學生運動が高揚するなか、薪はひとり杜若の身體に熱い視線を注ぎ續けていた。

人を惑わせ震え上がらせるような杜若の奇怪な笑み。耳元で囁くときの口紅の香り。彼はあの香りをいつまでも忘れることができなかつた。そして杜若の大きな黒い瞳、表情豊かな眉、愛らしくて豊満な胸……これらとともにやつてきたのは、たちまちに何かを失つてしまつたかのようなやるせなさではなく、振り拂いたい

けれどもそうすることができない憎しみでもなく、火のように熱い自然な欲求のほとばしりだった。こんなことは今まで一度も経験したことがなかった。なんてことだ、彼は何ものかに變わってしまったのだ！薪は蛇のように身體を振らせながら、シーツと布團を熱く抱きしめ茫然としていたのだった。

こうした病的な發作が起こつてから、杜若を見かけるたびに、そしてさらには彼女の聲を聞くたびに、薪は顔を赤らめずにはいられないのだった。(傍線は引用者による。以下同。)

「奇怪な笑み」、「口紅の香り」、「大きな黒い瞳」、「表情豊かな眉」、「愛らしくて豐滿な胸」——この場面においても、薪は杜若の表情、香り、體つきとその全てを觀察し、賞玩しようとする。五感を研ぎ澄ませながら、杜若という女性の魅力を餘すところなく堪能しようとする薪の姿がありありと浮かび上がってくる。ただし、こうした薪のまなざしが常に一方的なものとして描かれているを見逃してはなるまい。薪の執拗な視線に對する杜若の反應は先の二つの引用において一切描寫されていない。つまり、こちらは眺めるばかりで相手は眺められるばかりなのである。薪のまなざしが杜若のそれと交差することは決してなかつたのだ。以上の描寫は、二人の關係がデイスコミュニケーション・ション状態に陥っていることを暗示しているのかもしれない。

さらに併せて確認すべきは、杜若の魅惑的な身體が薪に「火のように熱い自然な欲求」をもたらしていることである。「火のように熱い自然な欲求」とはいったい何を指しているのか。そのことを考えるうえで重要な鍵となるのは、「蛇」という語である。矛盾は、「火のように熱い自然な欲求」を抱き、「身體を振らせて」身悶えする薪の姿を

禍々しい「蛇」になぞらえ、さらにはそれを「病的な發作」と形容する。以上の記述を踏まえるならば、「火のように熱い自然な欲求」とは、互いを精神的に高め合うような崇高な愛情などでは決してないだろう。むしろそれは、理性では制御しえない本能的な欲望にほかならないのではないか。このように解していいとすれば、薪の心に生じた非理性的な欲望は、先に見た異性に對する一方的なまなざしともやはり無縁ではないのだろう。どちらも相手の感情に思いを巡らせることもない、自己本位のものである點で共通すると考えられるからだ。こうして、異性の同級生の身體に注いだ偏執的かつ一方的な視線は、やがて激しく燃え盛るような薪の内なる欲望を喚起してゆくのである。

#### 四. 愛欲の暴走

前節では、女性の身體に注がれた薪の執着的なまなざしについて検討してきた。薪は異性の魅惑的な肉體を舐めるような視線で觀察し、湧き上がる熱い欲求を抑えきれずにいる。金民天や瑞民が『路』の主題のひとつを「戀愛」として捉えていたことは先に見た通りだが、薪の抱いた感情は純粹で美しい愛と言うよりも、むしろもつと生々しい、「愛欲」と言うべきものではなかつたか。では、こうした「愛欲」は『路』のもうひとつの主題、すなわち「革命」とともにどのように表現されていたのだろうか。

光華書局版および文化生活出版社版を比較してみると、瓊末な誤字の修正等はさておき、愛欲描寫が削除された箇所はテキストの第一章と第二章に集中していることに氣付かされる。第一章および第二章は、二度目の學生運動が最高潮を迎えるさまを描く。本稿では特にこの二つの章に着目したうえで、『路』における「愛欲」と「革

命」をめぐる問題についてさらに考えてみたい。そのために、まずは第一章に至るまでの内容を改めて概観しておこう。

「秀才派」と「魔王團」の二つの學生團體は老荊の一時的な排斥に成功するも、「魔王團」の裏切りにより一度目の學生運動は暗礁に乗り上げてゆく。途方に暮れる薪を導いたのは、獄中生活を経て優れた革命家となった雷であった。雷は監獄での経験がどのように自分を成長させたのかを興奮を交えて薪に語り聞かせると同時に、「(前略)君たちには今回の失敗の教訓があるんだから、二度目には勝利の希望があるさ」と薪の士氣を鼓舞する。啓蒙家としての雷の存在は薪の言動に多大な影響を與えることとなる。

折から、大學總務長・老荊の大學復歸により學生運動が再燃する。雷の啓蒙を受けた薪は大勢の學生たちとともに大講堂へと押し寄せた。群衆の中に杜若の姿を認めた彼は、彼女のもとへと駆け寄り束の間の會話を交わす。

「大禮堂つて名前なのに第五教室よりもちつとも大きくないんだね。人がぎゅうぎゅうに押し合いへし合いしているものだから、まったく息が詰まってしまふよ。さつきは危うく氣を失つて倒れてしまふところだったんだ。」

「見ていたわ。あなたの頭はわたしの肩の上にしばらく寄りかかつていたのよ。たぶんあなたはわたしだってわからなかったのね。」

その話をしたときの杜若の微笑みに、薪の心は飛び跳ねた。それと同時に、あるとき甘くて温かみのある香りを嗅いだような氣がしたことを思い出した。彼は呆けたように優に三十秒にわたつ

て杜若を見つめていた。だがその後、鬭争の感情と責任の意識が再び彼を丸ごと占據した。彼は唇を噛み締めながら笑うと、背を向けて去つていった<sup>⑤</sup>。

押し寄せる學生たちの人熱に壓倒された薪と彼の體調を氣遣う杜若との親密なやりとりが展開されたのち、彼女の微笑みや「甘くて温かみのある香り」に心を奪われた薪の心境が綴られてゆく。杜若の表情や香りに魅了される薪の姿は、前節で取り上げた一度目の學生運動の場面にも見出すことができる。そして二度目の學生運動の最中、われわれはまたしても彼女の姿態に執着的なまなざしを注ぎ續ける薪の姿を見ることとなるのである。

だが、このような描寫が見出せる一方で、次の点にも注意する必要がある。それは、杜若に熱い視線を送っていたはずの薪が彼女から意識的に目を背ける姿もまた描寫されている点である。つまりこの場面には、杜若に對する情熱的な欲望を振り切り、「鬭争の感情」および「責任の意識」を胸に學生運動の隊列へ舞い戻ろうとする、薪の確固たる意志が示されているのである。

以上、第一〇章までのあらすじを駆け足でたどってきた。續く第一章は、學生自治を訴える大規模な學生運動、および薪と杜若との濃密な愛情關係が主旋律を成している。學生運動を新たに主導する「秀才派」の學生たちは、「秀才派」の主たる成員の釋放や公選による大學總務長の選出を訴えるも、大學當局は頑として聞く耳を持たない。擧句の果てには騒動を起こした學生たちへの彈壓をさらに強化する始末であった。このような報に接した杜若は、薪に對して輕率な行動をとらないよう忠告するが、彼女の忠告をよそに彼はこうつぶやく。

「犠牲なんてへつちやらさ。そういうった人はいつぱいいるよ。こんな世界、ぼくにはいいところなんて少しもないのさ」<sup>26</sup>。大學當局と學生との間で一觸即發の緊迫した状況が續くなか、薪はあえて「犠牲なんてへつちやらさ」と言いなす。こうしたいささか大仰な言には、死をも恐れまいと虚勢を張る、薪の屈折した心理が表現されていよう。

ただ、死を恐れぬとはいうものの、人にとつてやはり死は避けがたく恐ろしいものである。事實、光華書局版の『路』には、生と死の狭間で揺らぎを見せる男子學生の生身の姿も點描されている。では、その姿はどのように表現されていたらうか。

「犠牲なんてへつちやらさ」と、死をも恐れず學生運動に身を投じる覺悟を示した直後、薪は「炎、銃彈、血、監獄、處刑場」といった光景を次々と腦裏に浮かべ、鬭争への情熱をより一層滾らせてゆく。ところが、續く一節において、薪は先の決意を一轉させるような言動に出る。

杜若のため息で突如として目が覺めた。視線が振り向きざまの彼女の丸く突き出た身體の側面を捉えたとき、彼はすぐさま前に進み出て、狂ったように彼女を抱きしめ、ヒステリックに何度もこう言った。

「杜若、杜若、ぼくを愛してるの？ああ世界！ああ人生！死！愛されずして死ぬ！杜若、杜若！ぼくは嫌だ！ぼくはお断りだ！ああ、ああ！杜若、杜若！」

彼の目は鋭く、そして血走った。まるで猛獸が喰らいつくかのように、彼は杜若を抱き上げた。引きずり回して横倒しにしようとしたし、地面に押しえつけようとしたし、引き裂こうとした。

彼は狂ってしまった！杜若はもがいた。最初は聲も出せずにもがいていたが、その後、恐怖ばかりが彼女の心を打ちのめし、彼女は震える聲でこう叫んだ。「どうして！どうして！薪、あなた狂ってしまったのね！薪！薪！」すると抵抗する力を失ってしまったかのように、彼女の手足は力なく垂れ下がった。彼女の大きくて黒い二つの瞳からは涙が流れ落ち、その顔色は死んでしまったかのような白さだった。

その涙のせいなのか、ただ自分の情熱を全てぶちまけてしまったからなのか、薪の腕はにわかに力を失い、物を取り落とすかのように杜若を放り出すと、一步後退りして機械室の扉にもたれかかり、眉を吊り上げ呆然とするのだった。<sup>27</sup>

以上の三五〇字にも及ぶ濃密な描寫は文化生活出版社では全て削除されている。まず目を惹かれるのは、この箇所においても杜若の身體に對する薪の偏執的なまなざしが描寫されていることである。杜若の「丸く突き出た身體の側面」を捉えた薪は、彼女への情熱的な欲望を剥き出しにし、無我夢中で熱い抱擁を迫る。その過剰な行爲が「狂った（原文では「瘋」）」と繰り返して表現されていることから、杜若の肉感的な姿態に目を奪われた薪にはもはや冷静な感情は残っていないかつたと言えらう。この場面には、學生運動の最中であつて分別を失い狂亂する薪のありのままの姿が現れているのである。

以上のように讀み解いてくるとき、絶望に満ちた薪の叫びをわれわれは見逃してはならない。この悲痛な叫びには、愛欲に溺れ理性を失つた彼自身の本心が吐露されていると解すべきだろう。その意味で興味深いのは、薪の口から是が非でも生に縋りつこうとする言葉が表れ

ていることである。「死！愛されずして死ぬ！杜若、杜若！ぼくは嫌だ！ぼくはお断りだ！」という彼の言葉には、杜若から愛を得られず死ぬことに對する恐怖の念、あるいは拒絶の意思がはつきりと見て取れる。先述した通り、薪は學生運動に身を捧げる決心を固め、「犠牲なんてへつちやらさ」と嘯っていた。しかし、それにもかかわらず、理性と對極に位置する愛欲が目の前に立ち現れてきたとき、薪の掲げた信念は一瞬にして破綻を來すこととなつたのだ。理想は現實によつて脆くも打ち碎かれてしまつたのである。このような心の揺らぎ——現實と理想の乖離に直面した男子學生の逡巡や葛藤を如實に描き出しているところに、光華書局版における『路』のほかに類を見ないユニークさを見出すことができる。

## 五. 愛欲と革命のはざま

「秀才派」のピケ隊と「魔王團」の學生との衝突および警察の介入の報を受け、大學構内はさらなる混亂状態へと陥つてゆく。學生たちの暴動に巻き込まれ負傷した薪は、杜若によつて病院へと運び込まれる。第二章は病床に伏す薪と杜若との會話から始まる。學生運動が新たな展開を遂げていることを告げられた薪は、「あの人たちは闘争の只中にいるのに、ぼくが身を潜めていられるなんて思ふかい？それに一人でこんなところにいるなんて死んでしまうくらい寂しいよ」と學生運動のために病身を押し立て上がる意志を示す。そしてその意志を胸に、「杜若、ぼくはやつぱり出ていくよ。友人のところに行くんだ。ぼくに油繪を送つてくれたあの雷さ」と自らを啓蒙してくれた革命家・雷とともに革命の世界に邁進することを力強く決意するのである。

さて、先述の通り、文化生活出版社にて『路』を改訂出版するにあたり、茅盾はいくつかの「不必要な戀愛描寫」を削除していた。そのことを踏まえたうえで光華書局版と文化生活出版社とを比較すると、第二章の結末部分の印象が大きく異なることに氣付かされる。まずは文化生活出版社版の結末を讀んでみよう。薪の確固たる決意を快く受け入れた杜若は、もう一日病室で安静にするよう言い残し、彼の入院費を工面するために病室を後にする。「すると何もかも決定したかのように、彼はベッドから起き上がり、壁にかかったカルテと鉛筆を取り外すと、その紙の裏に一通の手紙を書いた」<sup>31</sup>。小説は以下の手紙の引用で閉じられている。

「父上母上、まずはお赦しください。家庭を飛び出した子供は、わたしたちの故郷にはすでもう數多くおります。わたしのことを慮る必要もございません。死生も窮達も全て自分次第です。時代がわたしに進ませたのは狭き道であり、前進するか、人に踏み殺されるかのどちらかです。足元に敷いて登るための梯子になるなんて、わたしはお断りです。前進あるのみです。前進にはなおも活路があります。父上はいつも私を叱つておりました。『善を欺き惡に手を貸すような家風に恥じる眞似はしてはならない』と。ですが父上！いま息子が自ら探し當てた道を進まなければ、間接的に「惡に手を貸す」ことは避けられません。これは最後の手紙です。息子はわびしく老いてゆくあなた方のことを思わなかつたことはありません。息子の心は悲しみのあまり砕け散りました。ですが、たとえ人格や良心を手放したとて、あなた方を扶養することはできません。それに人格や良心がなくなれば、息子もいな

くなりません。これをもつて決意いたします……………」<sup>(32)</sup>

出立の間際に書き残された手紙には、老父母に對して孝養を盡くせないことへの罪悪感とともに、革命に對する竝々ならぬ決意が綴られている。その手紙の内容で最も注目すべきは、薪が善悪二元論の立場から自らの決意の正當化を試みていることである。彼にとつての「善」と「悪」とはいったい何を指しているのか。「いま息子が自ら探し當てた道を進まなければ、間接的に「悪に手を貸す」ことは避けられませんが」という記述を踏まえるならば、この二項對立の圖式は次のように認識されていたのだろう。すなわち、「善」とは信念を同じくする雷とともに革命の世界に邁進すること、そして「善」に對置される「悪」とは、革命という大きな目標から目を逸らし、病室にとどまり続けることとして、薪はこうした認識に立つたうえで、脇目も振らず雷とともに革命活動に専念すること（＝「善」）を決意しているのである。

以上、文化生活出版社における『路』第一二章の結末について確認してきた。丁玲や胡也頻の左聯加盟後の創作について知るわれわれは、こうした男子學生の形象にやはり既視感を覚えずにはいられない。革命家の啓蒙のもとに新しい世界へ勇往邁進してゆく理想的な青年少女の姿を説く物語は、一九三〇年代を通じて陸續と生み出されてきた。文化生活出版社版の『路』も、この系譜に位置づけて讀むことができるだろう。

だが、光華書局版における『路』の結末はどうだろうか。先述したように、光華書局版の結末は文化生活出版社版のそれとは大きく印象を異にする。前者では、杜若がまさに病室を立ち去ろうとする直前、

薪自身にとつて彼女がかけがえのない存在であることを再び意識する場面が挿入されている。その場面を一部引用してみよう。

（薪は…引用者注）杜若の手を離すと、彼女の心を引き裂くかのように彼女をじっと見つめたのち、氣を落として顔を背けた。どうやら限らない悲しみに包まれているようだった。この意味が杜若にはわかった。二つの意識のせめぎ合いが彼女の心に蘇ってきた。呆然としてしばらくの間立ち盡くしていると、ついに生活によつて作り上げられた習慣が勝利を収めた。ところが、まさに薪に別れを告げようとしたその時、ちょうど薪は顔をまたこちらに向け、彼女を見ながら、ため息をついてどつちつかずの様子でこう尋ねた。

「君がぼくに與えてくれるのはお金だけなの？」

杜若の顔色が變つた。ぐるりと方向轉換をして、いきなり薪のベッドの前へと驅けていつてひざまずくと、顔をベッドの縁に載せて薪の顔をじっと見つめ、一呼吸も置かず早口でこう言った。

「わたしの心もあなたにあげるわ。でもあなたと一緒にいるのはだめ。昨日の朝もあなたに言つたけど、一緒になつたらあなたにとつて良いことはないし、わたしにとつて良いこともないもの。あなたはわたしにものごく腹が立つはずよ。その時わたしのことをものすごく恨めしく思うわ！」

「ぼくのこと愛してないの？」

「愛！これがわたしの愛し方よ。わたしのこと、少しだけ愛させてあげる。」

薪は顔を赤くして目を見開き、鼻の穴もわずかに震え動いていた。<sup>(33)</sup>

二人の饒舌な語りを中心とするこの描寫は、およそ三頁にわたって詳細に綴られる。光華書局版の『路』第二章は全一三頁から成る物語の最終章である。その本章にあつて、矛盾は約四分の一もの紙幅を割いて彼らのやりとりを巧みに描き出している。

そうした濃密かつ印象的な描寫において注目したいのは、杜若の心に蘇つてきた「二つの意識のせめぎ合い」という言葉である。この表現については、光華書局版の第二章の冒頭部分でも示されている（なお、文化生活出版社ではその描寫は削除されている）。學生運動の新たな展開に心を震わせる薪の力強い掌から杜若が彼への熱い想いを募らせてゆく場面に、「……杜若の胸は思わずどきどきした。二つの意識のせめぎ合いを経験したのはこれが初めてで、彼女は異様な煩悶を感じ始めた」とあるように、つまり「二つの意識のせめぎ合い」とは、薪の崇高な信念を尊重すべきだと頭では理解しているながらも、彼に對する情熱的な欲望を断ち切ることはできないという、彼女のジレンマを指したものと解すべきだろう。ひとことで言い表せば、ここには「愛欲」と「革命」の緊張關係が露わになつているのである。

ただし、先の引用部分において、こうした板挟みの状態に陥つていたのは杜若ばかりではない。薪の内面にもまた、「二つの意識のせめぎ合い」が生じていることを見逃してはなるまい。では、それはどのようなかたちで表現されていたか。この場面においてもやはり薪のまなざしに着目してみたい。別れの間際にあつて、薪は痛切な面持ちで杜若を凝視したかと思うと、落膽した様子で彼女から視線を逸らす。

そしてその直後、再び彼女に視線を戻し、「どつちつかずの様子」で彼女に對する愛を口にする。繰り返し揺れ動く薪のまなざしからは、彼自身の内心の葛藤が透けて見えてくるかのようだ。つまりここには、雷とともに革命の世界に生きることを固く決意していたにもかかわらず、湧き上がる欲望に溺れ、またしても自らの決心を鈍らせる薪の複雑な心情が描き込まれているのである。本稿第二節に見た瑞民の書評に述べられていたように、「どれほど重大な革命闘争のもとも、さらには病院内であつても、薪はなおも戀愛のことを片時も忘れていない」ことは一目瞭然だろう。光華書局版の『路』は、「愛欲」と「革命」の二極に引き裂かれ、幾度となく懊惱を繰り返す等身大の男子學生の姿を鮮明に浮き彫りにしてみせたテキストとして、同時代の小説にはない魅力が感じられる。

## 六. 馴致する言論空間——結びにかえて

以上、『路』の二つの版本間の違いについて論じてきた。光華書局版には「愛欲」と「革命」の狭間で逡巡を繰り返す男子學生の姿が誇張も粉飾もなく描寫されている。心の内に相反する感情を抱え、そのいづれを選択すべきか悩み苦しむのは人の世の常だろう。葛藤や懊惱を抱えない者など世の中には存在しない。その意味において、光華書局版に描かれる男子學生には人間の本性とも言うべき感情が備わつていると考えられるだろう。だが、文化生活出版社に見える男子學生はどうであつたか。この版本では、「愛欲」と「革命」をめぐる生々しい緊張關係はことごとく削除され、「革命」という理想のみを一心不乱に追い求める、いわば單一的な男子學生の姿が造形されているのだ。光華書局版から文化生活出版社版へと書き改められたことにより、

ありのままのリアルな男子學生の姿は、上邊のみを取り繕った人間味に乏しい男子學生の姿へと改變されてしまったのである。

『路』の改稿を直接的に要請していたのはあくまでも瞿秋白個人である。だが、彼の主張の背後には、「革命」を掲げた左聯の理念が間接的に作用するような言論空間が広がっていたことだろう。このような事例——個別の文學テクストをある一定の枠組みに嵌め込もうとする動きは、左聯成立以後、ますます激しさを増してゆく。その最たる例が一九四二年に毛澤東（一八九三〜一九七六）により提起された「延安文藝座談會での講話」（「文藝講話」）であろう。毛澤東は「文藝講話」において、あらゆる文藝活動は人民とりわけ労働者、農民、兵士に共産黨の政策を宣傳啓蒙するためのメディアであると規定する。そしてこの文藝全般の指導理論は、中國共産黨および毛澤東の權威増大に伴い、次第に絶對化されてゆく。一九五〇年代の文學作品が相次ぐ政治的運動の最中に激しい批判にさらされ、改作を迫られた例は枚擧にいとまない。

ここで注目されるのは、人民共和國成立という社會體制の大きな變化を迎えた茅盾もまた、自らの舊作に繰り返し修正を施している点である。一九五七年一〇月三日執筆の「寫在《蝕》的新版的後面」には、人民文學出版社が『蝕』三部作の再版にあたって内容の一部改訂を要請してきたこと、その要請に對して字句上の多少の書き直しのみを行ったことが綴られている。だが、翌年刊行の『茅盾選集』第一巻に収録される『蝕』三部作では、字句の微細な修正にとどまらず、愛欲や政治意識をめぐる描寫までもが茅盾の手で大幅に削除・修正されている。是永駿は茅盾のこうした過剰な改稿作業に「政治體制と文學との關係のゆがみ」を見て取る<sup>①)</sup>。人民文學出版社の要請の背後には、「文

藝講話」を文藝全般の指針として普遍化した新中國の言論空間が広がっていたことは疑いを容れないだろう。

『路』の改稿と『茅盾選集』収録作品のそれとは、前者は瞿秋白からの要請、後者は人民文學出版社からの要請という点においては異なっているかもしれない。だが、いずれも書き手の外部に広がる言論空間を意識した改訂行為である点では共通していると言えるだろう。茅盾にとって、あるいは中國の作家にとって言論空間とはどのようなものとして存在していたのか、今後さらに考察を深めてゆく必要がある。

注

(1) 丁玲「一九三〇年春上海」(之一)、『小説月報』第二卷第九期、一九三〇年九月。

(2) 胡也頻『光明在我們的前面』(春秋書店、一九三〇年一月)。

(3) 左聯結成當初の文學史については、姚辛『左聯史』(光明日報出版社、二〇〇六年)總七二〇頁における詳細な議論を參考にした。

(4) 茅盾『路』は一九三〇年一月から一九三一年二月にかけて執筆、翌年六月に光華書局にて出版された。その後、戀愛描寫を大幅に削除したうえで、一九三五年十二月に文化生活出版社にて改訂出版されている。本稿では光華書局版(上海、一九三二年、總二〇七頁)をテクストとして、文化生活出版社版(上海、一九三五年、總一六六頁)との異同についても適宜論じる。以下、本稿の翻譯に關しては、特に注を附さない限り、本稿執筆者による。

(5) 茅盾『路』後記(文化生活出版社、一九三五年)二頁。「第一次的印本錯字多得很多。現在這第二次改版，所有的錯字自然盡力校正，同時我又刪掉了些句子，合計大概也有三四面罷。這被刪的部分，多半是不必要

的戀愛描寫，這也是尊重那位朋友的意見；他讀了第一次的印本後就說書中的戀愛描寫有些地方不必要。」

- (6) 茅盾と瞿秋白の交友關係をめぐつては、鍾桂松「同志・摯友・知己——茅盾與瞿秋白」、『人間茅盾：茅盾和他同時代的人』（河南人民出版社、一九九三年）四七〜七〇頁を參考にした。
- (7) 馮雪峰「中國無產階級革命文學的新任務——一九三二年十一月中國左翼作家聯盟執行委員會的決議」（『文學導報』第一卷第八期、一九三一年一月一日）。本稿での参照テクストは『中國新文學大系』（一九二七、一九三七）・文學理論集一』（上海文藝出版社、一九八七年）四一三〜四二四頁。
- (8) 茅盾「左聯前期『我走過的道路』中冊（北京、人民文學出版社、一九八四年）。本稿での参照テクストは『茅盾全集』第三四卷（北京、人民文學出版社、一九九七年）四三四〜四八〇頁。引用は四七五頁。
- (9) 同注（8）、四三四〜四八〇頁。
- (10) 茅盾「三人行」は一九三二年六月から一九三二年二月にかけて執筆、同年六、九、一〇、一一、一二月の雜誌『中學生』第一六期から第二〇期にかけて連載された。
- (11) 瞿秋白（筆名は易嘉）「談談『三人行』（『現代』第一卷第一期、一九三二年三月一〇日）。本稿での参照テクストは『瞿秋白文集』第一卷（北京、人民文學出版社、一九五三年）三三四〜三四六頁。
- (12) 陳幼石「回歸的迷惘——茅盾的《路》與『三人行』（『茅盾研究』第七輯、一九九九年六月）二〇六〜二二一頁もまた、『路』に對する瞿秋白の評価を「談談『三人行』」と關連付けて考察する。
- (13) 金民天「『路』的批判」（『讀書月刊』第三卷第五期、一九三二年）一九〜二七頁。
- (14) 同注（13）、一二五頁。「作者是擅長描寫小資產的革命的戀愛心理的。
- 這本『路』的主人，自然是也脫不出這個圈子，不過所異的革命的風潮罷了。沒落的小資產階級的青年，對於人生的懷疑，一切事物的神經性是本書主人的典型。主人公意識不健全，這是無可諱言的事實。」
- (15) 茅盾「從牯嶺到東京」（『小說月報』第一九卷第一〇號、一九二八年一月一八日）。本稿での参照テクストは『茅盾全集』第一九卷（北京、人民文學出版社、一九九一年）一七六〜一九四頁。引用は一九〇頁。「我就覺得中國革命的前途還不能全然拋開小資產階級。」
- (16) ちなみに『讀書月刊』第三卷第五期には、第三種人論爭の幕開けとなつた胡秋原「關於文藝之階級性」（一九三二）も掲載されている。この點を踏まえれば、『路』に對する金民天・瑞民の批判は第三種人論爭と軌を一にしていた可能性も考えられよう。
- (17) 瑞民「茅盾底路」（『讀書月刊』第三卷第五期、一九三二年）一〇七〜一一九頁。
- (18) 同注（17）、一一七頁。「茅盾的描寫着新，本欲使他後來變為『極端革命』，然而反敗了，因為只要看新在何等嚴重的革命鬥爭之下，甚至在病院裏，却仍念念不忘着戀愛。照例，血液裏含着瘋狂熾熱的革命情緒時，是談不到戀愛的。」
- (19) 白水紀子「蝕」三部作の女性像、『轉形期における中國の知識人』（小谷一郎、佐治俊彦、丸山昇編、汲古書院、一九九九年）九三〜一二九頁。
- (20) 茅盾「動搖」（『小說月報』第一九卷第一〜三號、一九二八年一〜三月）。
- (21) 李洪華「二十世紀三四十年代大學敘事中的知識分子形象」（『求索』第一期、二〇一八年）一四八〜一五五頁は、女性の身體に魅了される新的姿が活寫されている點に着眼する。
- (22) 同注（4）、一三頁。「我是不想讀到畢業了。究竟我們在學校裏學了些什麼呀？」
- (23) 同注（4）、一四頁。「薪突然站住了。他的含有深愁的爛爛的目光注在

女友的身上。比自己矮得多，也像是比自己年輕得多，專愛淘氣頑皮，整天跳來跳去的這個杜若，竟會說那樣的話！那樣的似乎應該出自蓉口中的老練的話！他的眼光移到了她的臉上。是一張頗為白皙的，有一堆大黑眼睛，和兩道會說話的眉毛的面孔。他從來不會仔細看過這面孔，也是從來不曾懷著現在那樣的心情去看這面孔。他忽然覺得不好意思了，垂下眼去，成了化石似的一動也不動。」

- (24) 同注(4)、四一、四二頁。「是杜若的使他迷亂又使他戰慄的奇異的笑；是杜若附耳低語時的口脂香，他永遠忘不了這香；是杜若的大黑眼睛，會說話的眉毛，嬌小豐滿的胸脯……和這些一同來的，不是忽忽若有所失的苦悶，也不是想撇開卻又不能的怨恨，而是火一樣的自然要求的勃然發動。這是從來不會有過的。天哪，他變成什麼去了呵！新像蛇一樣攪住了那床單被發怔。／經過了這樣的病態的發作以後，每逢瞥見杜若，甚至於聽見她的聲音，薪忍不住要臉紅。」

- (25) 同注(4)、二二三頁。「……你們有了這一次失敗的教訓，第二次就有勝利的希望。」

- (26) 同注(4)、二六四頁。「名為大禮堂，並沒比第五教室大，人擠多了，簡直透不過氣，剛才我幾乎暈倒了呢！」／「我看見的。你的頭還在我肩膀靠了一會子。大概你不知道就是我。」／說這話時的杜若輕聲笑著，薪的心跳了；同時就記起那時彷彿嗅到一種甜而暖的香味。他癡癡地望著杜若，足有半分鐘。然後，鬥爭的情緒和責任的意識，重複把他整個兒佔領。他咬著嘴唇笑一下，掉轉頭就走。」

- (27) 同注(4)、一八八頁。「犧牲也算不得什麼。這樣的人多得很。這世界對於我沒有一點好處。」

- (28) 同注(4)、一八八、一八九頁。「被杜若的一聲嘆息猛驚醒過來，眼光剛好接觸著她的轉過去的圓凸的側形，他突然搶前一步，發瘋似的抱住了她，歇斯底列地反覆說：『杜若，杜若！愛我不？這世界！這人生！死！

沒有被人愛過就死！杜若，杜若！我不願意！我不甘心！呵，呵！杜若，杜若！」／他的眼睛變得小而且紅；像什麼猛獸攫得了一口食，他將杜若抱離了地，拖著走想將她橫過來，又想將她按住地下，又想將她撕碎；他瘋了！杜若掙扎。最初是啞的掙扎，然後，全然的驚怖襲擊著她的心，她顫著聲音叫：『怎麼！怎麼！薪，你瘋了！薪，薪！』于是好像失了抵抗力似的，她鬆散了肢體，她的大黑眼睛裏淌下兩行眼淚，她的臉色像死一樣白。／也許是因為這眼淚，但也許是因為已經洩盡了他的熱情的爆發，薪的臂膊忽然鬆開，像掉下一件東西似的將杜若仍下了，就退後一步背靠在槍械室的門上，楞起了眼睛發怔。」

- (29) 同注(4)、一九八頁。「你想，人家正在鬥爭，我却躲開麼？況且一個人在這里，寂寞死了。」

- (30) 同注(4)、二〇一、二〇二頁。「杜若，我還是要出去。我到一個朋友那里去。就是送給我油畫的那個雷。」

- (31) 同注(4)、文化生活出版社的引用は一六五頁。「于是像什麼都決定了似的，他從床上爬起來，取下了掛在牆頭的診察紀錄紙和鉛筆，就在那張紙的背面寫一封信」

- (32) 同注(4)、文化生活出版社的引用は一六五、一六六頁。「雙親大人：先請不要生氣。脫離家庭的兒子，我們家鄉已經很多。也請不必替我憂愛。死生窮達，在人自為。時代給我走的，是一條狹路，不是前進，便是被人踏死。給人墊在腳下做他爬上去的梯子，我不肯。只要向前進。前進還有活路。父親往常教訓我，要我『無愧于未嘗欺良扶惡的家風』，父親啊！什麼都免不了是間接的『扶惡』，除非走上兒子現在自己所找到的路！這是最後的一封信了。做兒子的未嘗不想念兩位孤苦衰老的雙親，兒子的心碎了，但是即使賣掉了兒子的人格，良心，也仍然不夠贖養你們。而且沒有了人格和良心，也就沒有了兒子。以此我決心……」

- (33) 同注(4)、二〇三、二〇四頁。「放下了杜若的手，彷彿要撕裂她的

靈魂似的瞅了她一眼，頹然側過臉去，好像是無限淒愴。這意義，杜若是明白的。兩種意識的鬥爭入回到她心頭。惘然站著半晌，終于是已經生活所鑄成的性習得了勝利。却正待和薪作別，剛好薪又轉過臉來看著她，喟然似問非問地說：「你給我的只是經濟？」／杜若臉色變了，拖一個圈子，驀地跑到薪床前蹲下去，把臉擱在床沿上，緊瞅著薪的面孔，不轉氣似的說的很快：「還有我的心也給你。可是不能和你在一處。昨天早上已經對你說過，在一處，于你沒有好處，于我也沒有好處。你會被我氣死！你那時要恨死我！」／「你不愛我？」／「愛！是我自己的愛的方式。可以讓你愛一下子！」／薪的臉紅了，瞪著眼睛，鼻孔也微微竦動。」

(34) 同注(4)、一九七頁。「……杜若禁不住心跳了，兩種意識的鬥爭的第一次經驗，開始給她一些異樣的苦悶了。」

(35) たとえば蕭也牧「我們夫婦之間」(『人民文學』第一卷第三期、一九五〇年)は、小資産階級思想に染まった作品として激しい批判にさらされ、作者による大幅な改作が行われるに至っている。

(36) 茅盾「寫在《蝕》的新版後面」(『茅盾文集』第一卷、人民文學出版社、一九五八年)四三一～四三四頁。

(37) 是永駿「茅盾と三〇年代」(『野草』第一四・一五號、中國文藝研究會、一九七四年)三〇～四二頁。引用は三一頁。なお、人民共和國成立後の茅盾の一連の改稿に關しては、同氏『茅盾小説論——幻想と現實——』(汲古書院、二〇一二年)總二七九頁に詳しい。

【附記】本稿は、シンポジウム「古典から近代へ…清代と民國期の學問」(二〇一三年八月一〇日、於大阪大學)にて発表した内容に基づく。席上、ご意見をくださった方々に厚く御禮を申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費22J10341の助成を受けたものである。